

■特別寄稿

奄美の循環型社会形成と鹿児島大学 —奄美の「島」コスモス創出事業シンポジウム挨拶*— 永田 行博（鹿児島大学長）

I. 鹿児島大学の中期目標と奄美

鹿児島大学は平成16年度より法人となり、文部科学大臣から6年間において達成すべき業務運営に関する目標を中期目標として示され、それを達成するために中期計画を提出して、文部科学大臣から認可を受けています。この中期計画の達成度に応じて、次期の6年間の鹿児島大学の予算が決定されます。

鹿児島大学の中期目標には、本学の役割として、教育、研究、社会貢献、国際交流を4本の柱として掲げています。

研究に関する基本的目標としては、「鹿児島が温帯から亜熱帯まで、南北600kmに及ぶ広大で多様性に満ちた自然を有しており、南北の文化が接する地域に立地する利点を活かして、自然、歴史、文化、産業、医療分野等の地域的かつ世界的課題について研究を進め、その成果を世界に発信し、世界トップレベルの研究成果を生みだし、『世界の鹿児島大学』を目指す」としています。

また、社会貢献の基本的目標としては、「地域における産業・文化・教育・医療の多種多様な要請に応えるとともに、産学官連携を推進し、それらの発展に積極的に貢献し、教育・研究両面で地域の文化中枢としての機能を強化する。」としています。

こうした中期目標を達成するために、鹿児島大学は、他の国立大学では真似することの



出来ない、本学独自の特徴を発揮するために、離島、特に奄美群島を対象にして、文化・自然・人間・経済・情報・医療・農学・工学等々の領域について学際的総合的な研究を進め、その成果を広く一般に公開し、奄美群島を中心とした島嶼地域との地域連携、また同地域への地域貢献を進めようとしています。

II. 鹿児島大学全学総合プロジェクトと奄美

奄美との繋がりは、鹿児島大学の全学総合プロジェクトとして、当時の山田法文学部長を中心にして、平成15年度から学長裁量経費を措置し、「島嶼圏開発のグランドデザイン—南西諸島における環境ガバナンス型地域政策」をスタートさせました。これらの成果は、月刊誌「奄美ニューズレター」に詳細に報告されています。現在、28号が刊行されており、奄美に関する研究の成果が着実に蓄積されてきています。もう一つの具体的事業としては、やはり法文学部が旧名瀬市に開設した、奄美サテライト教室があります。こちらも継続して発展させる計画にしています。そうした事業の総括として、平成18年3月

*本稿は、平成18年11月20日に奄美市で開催された「奄美の『島』コスモス創出事業—世界自然遺産と持続可能な発展」プロジェクトによるシンポジウムにおける永田学長の挨拶をまとめたものである。

には、名瀬市、現奄美市と包括連携協定を締結しました。この協定は、鹿児島大学が特定地域と最初に結んだものです。連携・協力し、相互の発展に寄与することを目的としています。

鹿児島大学は、こうした取り組みを通して、総合大学としての力を結集して、学部の壁を越えた、文理融合の壮大なプロジェクトを計画しています。

その内容は、

- ・人と自然との共生を目指した21世紀の新しい時代に相応しい学問分野を創出することを可能にするプロジェクト。
- ・鹿児島大学から持続可能な21世紀型の循環型社会モデルを提案する研究プロジェクト。
- ・総合大学としての鹿児島大学の特徴を活かした文系・理系融合の総合プロジェクト。
- ・奄美との包括連携協定に基づき、島嶼圏地域が求める高等教育機関としての「知の拠点」としての役割を果たすプロジェクト。
- ・奄美の世界自然遺産登録を目指した、鹿児島大学の次期（平成22～27年）中期目標の重点事業となるプロジェクト。

といった、壮大な構想の事業に着手する決意を固めています。

その出発点が、今回のプロジェクトである「奄美の『島』コスモス創出事業—世界自然遺産と持続可能な発展」です。

Ⅲ. 「奄美の『島』コスモス創出事業—世界自然遺産と持続可能な発展」プロジェクト

本プロジェクトでは、奄美が新しい循環型社会を築きつつ、世界自然遺産登録の実現を目標としています。しかし、世界自然遺産登録の実現は、ある意味で、一里塚に過ぎません。最終的には地域社会が全体として環境をできるだけ傷つけない生活スタイルに近づける方式を住民の方々と一緒に探究する方針です。このためには、先行した屋久島の経験と

奄美をとりまく条件の相違を考慮しなければなりません。

屋久島では、元々島に住む住民レベルによる循環型社会に向けた取り組みはあまり活発ではなかったといえます。しかしながら、保護地域と住民の居住区が空間的に分離している屋久島の場合は、それはそれで、あまり問題になりませんでした。しかし、奄美群島には12万人の住民が生活し、保護対象となる区域も生活空間と密着している部分が少なくありません。したがって、世界自然遺産登録が住民の生活スタイルに直接的な影響を与える度合いは、屋久島よりはるかに大きくなります。その一方で、12万人の住民の方々が安定した経済生活を営める方途も探らなければなりません。私たちは、実現が難しい両面を視野に入れたプロジェクトを進めようとしています。

私たち鹿児島大学は、この数年間、奄美の新しい発展を模索してさまざまな革新的な試みを進めてきました。しかし、残念ながら、それが奄美の人々から大いなる共感を引き出すまでには至っていません。その原因は鹿児島大学の取り組みの研究成果を住民に直接訴えたり、提案したりする機会が少なすぎたことにあります。また、その取り組みが住民自身の積極的な活動に結びついていなかったこともあります。

この反省に基づいて、本プロジェクトの取り組みにおいては、循環型社会づくりの具体的な実験事業を住民の見える場で試行しようとしています。また、当初から住民の方々と共働する態勢づくりを目指すことにしています。今回のシンポジウムは、この事業計画を奄美の方々に発表する場として位置づけていますので、どうしても奄美で開催することが必要でした。

プロジェクトを動かしはじめる時点で、地元の方々にそのめざす目的をアナウンスメントすることは大切だと判断しています。そう

した取り組みの意図は、私たちの間で早くから了解が得られていました。が、たくさんの地元の方々に集まっていただき、このメッセージを送る機会をいかに設定するかは、なかなか決まらなりました。

課題の重さに照らして、私たちのメンバーでは決定的にインパクト不足であり、外部の方の応援を求めざるを得ないとの判断がありました。そして、プロジェクトの目的に合致したメッセージを発していただける方を探してきた結果、養老孟司先生と小野寺浩氏のお二人をお願いしたいという案が浮かび上がりました。

今回、養老先生と小野寺氏のお二人をお願いした理由は、養老先生は、奄美の伝染病研究所に居られたこと、今年3月に鹿児島市での「世界自然遺産登録の講演会において人間が自然環境と切り離せないと強調されていたことから、私たちの目的に沿ったメッセージを送ってもらえる方と考えました。

小野寺氏は、当時、鹿児島県庁の担当課長として、屋久島を日本初の自然遺産登録させた方で、遺産登録を実現させるまでにいくつもの仕掛けを編み出されました。小野寺氏は、遺産登録することにより、屋久島は長期的に見て地域発展を遂げるという観点から仕事をされてきました。この間、屋久島を継続的に観察し、関与し続けてきた小野寺氏の間を通して、奄美が遺産登録を実現した場合に、その後の地域発展の可能性を語ってもらい、それにより、地域開発の大幅な後退を危惧する人々に心配ないとのメッセージを送って頂けると考えました。

これまで長年に培われた価値観を脱ぎ捨てることは容易でないし、転換は一朝一夕に起きないでしょう。私たちは中期的な本プロジェクトの遂行により、継続的に働きかけ、その出発点にあたる今年度のイベントにより、人々にとって奄美の自然がもつ魅力に気づき、新しい地域発展観を育んでくれる契機

となることをめざしたいと考えています。

養老先生には、大変ご多忙な中をこのプロジェクトに賛同いただき、奄美まで来て頂きました。本当に有り難うございます。また、小野寺氏には、財団法人の休暇村協会の常勤理事の職を擲って、鹿児島大学の特任教授になって頂きました。

私たちの企画では、養老先生と小野寺さんの対談は、第2部で予定しております。その前の第1部においては、地元の自然保護に関係している各種団体の方に集ってもらい、循環型社会の構築について、話し合う研究会を設定しました。

「奄美」は単に鹿児島県の離島の一部という位置づけではなく、世界の奄美と認知され、その文化・歴史・伝統が21世紀の新しい文化を創出する上で一つのパラダイムを作りだせるものと確信しております。そして、それを実現するためにも、文化的な発信力を飛躍的に高めていくことを望んでいます。

今日のシンポジウムがそのような場となることを祈って、さらに今後、奄美の大いなる発展を願って、私の挨拶とさせていただきます。